大量の重油をすくったのは
高性能ポンプでなく、
人の手だった。

始まりはナホトカ号。

全国から30万人ものボランティアが三国に集結したナホトカ号重油流出事故。大量の重油をすくったのは高性能ポンプでなく、人の手だった。ひしゃくですくい、バケツリレーで運ぶ、誰でも参加できるボランティアだった。

それまで持っていた地位や社会関係が組みなおされ、大会社の社長も、フリーターの青年も、小学生も、みんな一人のボランティアだった重油回収現場。

「そんなことは無理だ」という思いこみから解き放たれ、「何とかできるんじゃないか」、「もしかしたらやり遂げられるんじゃないか」というエネルギーに溢れていたボランティア本部。

それまで社会に位置づけられていた「私」が崩れたとき、そこに残った丸裸の自分に何ができるのだろう。

それを探しだし、自ら行動を起こしていくのが、ボランティア。

どんな時でも、誰にでも、その人だからこそできることが、必ずある。

それは、どれほど小さな力と思えようとも、何もないところから掴みだしたからこそ代え難い輝きを放ち、社会を動かす確かな力となることを、ナホトカボランティアは明らかにしたのだ。

「よみがえれ日本海！」の思いは、文字通り美しく光る海をよみがえらせた。

阪神・淡路大震災、ナホトカ号重油流出事故を経て育まれた日本のボランティア活動は、NPO法成立に結びついた。

ここ三国には、ボランティアの土壌がある。事故から10年を経た2007年、よみがえった海に感謝を込めて、「三国湊緑のリレープロジェクト」がスタートした。重油を回収したバケツリレーに学び、山・里・河・海がつながる三国の緑を次世代にリレーしていきたいという願いを込めて。

そしてみどリレーへ。

三国に多いマツ林。油気が多く、火力もあるマツは古墳時代から**製塩用につくられ管理されていたという。**

里山と人との
出会いの場をつくること

森を見れば時代がわかる。

マツは薪としても利用されたが、製塩が石炭や石油によって行われるようになり、薪がプロパンに代わると、マツ林は放置されるようになった。森を見れば時代がわかるの言葉通り、荒れた里山は鏡のように現代のライフスタイルを映し出している。

土地が肥えると、マツは弱ってくる。そこへ北米産のマツを経由して、長崎に約140年前から、福井には1953年前後からマツノザイセンチュウが入った。体長1ミリに満たないこのセンチュウは、マツの樹脂管を詰まらせ、枯死させる。天敵不在のまま膨大なマツ枯れが日本海を北上し、ここ三国のマツは壊滅的な被害を受けた。

2007年

里山と人との出会いの場をつくること。誰でも実施でき、持続可能な里山手入れの手法を確立することを目指した取り組みをスタートした。

「森の健康診断」では、里山の現状把握のため、植生と木の込み具合の調査を実施。

「森づくりプランを立てよう」では、調査結果をもとに、どんな活動がしたいか、どんな森をつくりたいか、そのために必要なことは何かをワークショップ形式で話し合った。

「森をつくる人になろう」では、プランにもとづき、枯れマツ伐倒跡地に三国で採取した種から苗木に育てたトベラ・シロダモ・ヤマザクラを植樹し、下刈りを行った。

「ずっと木を植えたいと思ってた」。「大きくなるのが楽しみだね」。「これからも、こんな風に続けていきたいね」。そんな活動をして、もっともっと地域が好きになっていく。3回続けた活動は、つまるところこの点に収斂されるのかもしれない。

2008年

借りた市有地をワッキの森、ナミィの森と名づけ、プロジェクト名を通称**「みどリレー」**としてHPを開設。

「森の健康診断」を小学生にもわかりやすい環境教育プログラム**「森のことば」**としてヴァージョンアップし、専門家の指導の下、三国にあった森づくりを協議して、下刈・チェーンソー講習＋枯れ松伐倒体験・植樹にいたる実践的な森づくり活動を実施した。6月・7月・10月・12月・1月・2月と実施した活動を経て、森の景観に少しづつ変化があらわれてきた。